
桜

三嶋文絵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜

【Nコード】

N0566S

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

桜の花びらでできた、人形用の服が欲しい。そんな突飛な頼み事を、ひよんなことからすずめは聞き入れる破目になる。 外部サイト「みくり」掲載作品です。

桜

計画的に持ち帰らなかった当然の結果として、卒業式の帰り道が危うく大荷物になるところだった。当日や前日より早く気づいたのがせめてもだ。手や腕から幾つもの袋を下げ、何度となく持ち替えたり地べたに置いたりしながら、近道の自然公園にさしかかっすずめはほっとした。どこかのベンチで休んでいこう。

花見客を呼び寄せる準備に入った桜の群れを右に見ながら、遊具の間を通り抜けたそのとき、幼い、胸の張り裂けるような絶叫が行く手に響いた。

反射的に足を止め、それから我知らず早足になって声のした方へ向かえば、事態はすぐに見えてきた。黒いランドセルが三人ばかり、小さな少女を見下ろしながら笑っていて、そのうち一人が人形を高高々と差し上げていたのだ。

「返して!!」

少女は片手に何かを握り、頑張れば届くかのように反対の手を伸ばして叫んだ。人形を持っていた少年は不意に仲間へ投げ渡し、恐らくその思惑通りに、少女は追いかけてくるりと回転した。

「やめなさい!」

まだ幾らか距離はあったがすずめは怒鳴った。少年の一人が気がついて興の醒めた顔をし、ちょうど飛んできた人形をつかむなり明後日の方向へ放って、あとの二人に知らせて逃げ出した。咄嗟に追いかけようとしたものの、両手に荷物をぶら下げたままでは思うようにいかず、すずめは結局諦めて立ち止まった。

既に見えない三人の去りし方を睨みつけ、それから少女に注意を向けると、手許に戻った人形を抱きしめて泣きじゃくっている。ほっとしたあまりの涙とは違うようだった。先ほどまで必死で泣くどころではなかったのが、今になってこみ上げてきたという様子でもない。兄の遺体にも縋りついているかのような、悲痛で切なくて

一秒ごとに高まる号泣だった。

人形ぐらいでと思いながら、放っておけずに歩み寄る。

「ほら、大丈夫だって。あいつらは追っ払ったから」

一言目が『ほら』というのは何か間違っている気もしたが、何にせよ、反応がない。自分の泣き声で聞こえないのかもしれないと、少しだけ声を大きくする。

「ねえ、どうしたの？」

今さら『どうしたの』もないけど。

「おに……お人形が……」

「お人形が？」

今度は返事があつた。復唱して覗き込むと、少女はようやく泣き顔を上げて、おずおずと両手を差し伸べた。片手には男の子の人形が、片手には 人形の左腕が、あつた。

すずめは目を剥いた。明らかに鉋による切り口が見えたためもある。弾みに千切ってしまったのではない、わざと切り落としたのだ。度が過ぎるだろうと憤ったのはしかし一瞬後のことで、目にした瞬間ぎよつとしたのはその切り口から覗いた赤のためだった。中の綿が生き血の色をしていたのである。

正直なところ薄気味悪かったが、それは少女の責任ではない。少女として今の今まで知らなかっただろう。年上の少女は気を取り直した。

「ね、泣かないで。お姉ちゃんが縫ってあげるから」

「縫って……？」

「そ。手術しよう」

すずめはにつこりしてみせた。左手の二つ目の袋には、裁縫箱がちょうど入っている。

あ、黒しかない。

白い糸は二巻き三巻きしか残っておらず、腕を縫いつけるにはとても足りなかった。黒い糸では縫い目が目立ってしまう。しまった

なあと思っただけ、仕方ないので後者を針に通した。こちらは十分二本取りにできる。

泣きやんだ少女はベンチの隣りに座って、見知らぬ少女の手許に真剣なまなざしを注いでいる。裁縫が得意なわけでもないから少々緊張を覚えたけれど、上手でなくても最適でなくても、このぐらいの子供にはわかるまい。ちよつとしたことで綻ばないように、隙間から綿の赤が覗かないようにと、その二点だけ意識しながらようやく一周し、玉留めを作ったところでふうと息を吐いた。どうやら形になった。

「ほら、できた」

糸を切って渡すと、少女は縫い目を食い入るようにみつめ、指先でそつと慎重になぞった。黒糸が後ろめたいすずめはもぞもぞとした。

「あれね、ちよつと目立つけど、なんだったらお母さんに縫い直してもらうといいよ」

「おかあさんはやってくれないもん」

少女は呟いた。

「おかあさんは鈴^{りん}たちが嫌いなんだもん。絶対助けてなんかくれないもん」

返事とも独白ともつかず沈んだ声で言うてから、不意にベンチから降りて頭を下げる。

「ありがとうございます。ありがとうございます……」

「いや、あの……いいんだけど、これぐらい」

喜んだりほつしたりするところではないのだろうか。真剣を通り越した深刻な調子で感謝されても対応に困る。

「……あの！」

深く長い礼の後で、少女は思い切ったように顔を上げた。両手の指は人形の胴をしつかりと支えている。

「あのね、鈴ね、……この子のお洋服が作りたいの」

「え？」

話の転換についていけず、すずめは当惑した。

「でも、鈴、縫い物できないから……あの」

「ええと」

「作っ……て？」

飛躍は自覚していると見えた。怒らせるのではないかという怯えが抑えきれずに伝わってくる。尤もすずめは思いがけなさに怒るところではなかった。

とても人形の洋服を欲しがっている顔ではない。母相手では望めないからといって、見ず知らずにねだつてのけた厚かましい顔ではない。切実で必死なその表情と、言葉の中身が繋がらず、頭の中で一、二回反復した。特に新しい意味もみつからなかった。

「……作るの？ 買っくんじゃ駄目なの？」

「売ってないと思う。特別な服だから。作らなくちゃいけないんだけど……」

「……なんでそんなの欲しいの？」

答えは返らなかった。少女は長いこと俯いてから、どうしても欲しいの、と言った。引き出せそうになかった。

すずめは首の後ろをかりかりと掻いた。今さら突き放せるような性格なら、百歩譲っていじめっ子たちは追い払ったかもしれないが、その後わざわざ腕を縫いつけてなどやらなかった。

「そう言われてもねえ、お姉ちゃんも縫い物がすごく上手なわけじゃないし」

「じゃあ、じゃあ、教えて？ やり方」

「……それならあたしがやった方が早いな」

独り言のように口にして、踏ん切りか諦めか何かがついた。

「どんな服なの？」

少女はぱつと顔を上げた。数秒置いて、輝かせた。

「花で作った服って、聞いたことある？」

「蝦夷菊のお襦袢？」

さらりと返ってきたことにすずめは驚いた。

「あるの？」

「メルヘンにね」

「……そう」

それでは参考にならない。お伽噺は服の構造になど触れるまい。姉は読んでいた本を閉じて上半身をひねった。それはつまり問いかけと同じで、そうなることは目に見えていたが妹は嘆息した。

「すずめらしいのね」

いきさつを聞いた姉の第一声はそれだった。

「桜の花びら」

妹は注文の一部を反復して頭を抱えた。

「そう来るとは思わなかったよ」

袖は手首まで、裾は足首までを覆う、桜の花びらでできた服。確かに店頭に並んではないだろう。

花びらは自分が集めるからと、訊かれる前にと急ぐように鈴は言った。散ったばかりのきれいな状態をいつまでも保てるわけではないとすずめは注意した。何度も触れば指の脂に侵されていくだろうし、そうでなくても時間が経てば萎んで枯れていくはずである。いいの、大丈夫、と鈴は繰り返したが、本当にわかっているのだろうか。

「でも、今さらそれはできないとは言えなかったんでしょ。すずめらしいわ」

「わかつてるよ……そういうところあるのよ、あたしは」

自分が断れば別の誰かに頼まなければならなかったはずだ。突飛な要求であることは、あの様子なら重々承知しているだろう。そんな頼み事を何度も何人にもさせるのは忍びなかったのだ。からかわれている可能性も、考えないではなかったが……そうだとしたらあの少女は相当な演技派だ。

「桜が散り始めたらねって言ってきたんだけど。その頃には忘れてたり飽きてたりするんじゃないでしょうね」

「放っておけないぐらい真剣だったんでしょ？ 自分の判断を信じなさいよ」

姉の応援が無責任に聞こえて、妹は再度溜め息を吐いた。

卒業式が終わり、自由時間の豊富な春休みが訪れた。あの一件が夢やからかいでなく本当のことだったか、少々怪しみながらあの公園に赴くと、鈴が片腕に人形を抱いたまま一心に花びらを拾い集めていた。

「鈴ちゃん」

呼ばれるまで気づかなかつたらしい。驚いたように振り返って、浮かべたのは安堵の表情だった。本当に来てくれるかと、向こうこそ怪しんでいたのかもしれない。

「まだ、これだけ……」

差し出した飴が何かの缶には、『だけ』と言われて想像するより多く花びらが溜まっていて、少女の努力を思わせた。人形の大きさを考えれば確かにまだ足りないけれど、どのみちたちどころに完成するわけではないのだから、まずはこれで十分だろう。

「いた？」

「いた」

「測ってきた？」

「きた。メジャーありがと」

メジャーと一緒に寸法のメモを渡すと、あら大きい、と姉は呟いた。

「思ったより時間かかりそうね」

「やり遂げられる気があんまりしないわ」

ぼやきながら裁縫箱を開け、桜の花びらに近い色の、新しい糸を針に通す。鈴から特に糸代は受け取っていない。ここまで来たらそんなことはもう構わないのだが、どこまできちんと理解しているのだろうかと思う。

花びらを綴り合わせる方法など探してもみつからなかった。そこ

そこ丈夫に見映えよくするには、どの程度重ねてどう縫えばよいものだろう。そもそも小さすぎ、しなやかすぎるものだから、なかなか上手く針が刺せない。俄か針子が苦戦する横で、姉は姉で何やら作業にかかっていた。

「こんな感じがしら。進んでる？」

「全然。何、それ」

「型紙よ」

紙のワンピースを掲げてみせる。

「完成像が見えるといいと思って」

「……男の子の人形なんだけど」

「天使の衣装のイメージね」

「ああ……まあ」

それなら男の子の人形に着せてもおかしくないかもしれない。鈴の希望には果たして合うのだろうかという懸念もあるものの、ありがたく使わせてもらうことにして、前身頃の左側を妹は手に取った。姉は満足げに鉄や紙の残りや鉄を片づけると、今度は自分の裁縫箱を出してきて、当たり前のように自分でも花びらを縫い合わせ始めた。すずめはそちらへ目を向けて どこか楽しそうな様子に、軽く肩を竦めて無言のまま戻した。

型紙を持って行って見せると、鈴は人形に当ててみて、嬉しそうにこくこくと頷いた。似合うかどうか試したというより、袖と裾の長さを確かめたいらしい。望みがどこにあるのか一層わからなくなる。それから鈴は新しい花びらの入った新しい缶を差し出した。

「まだ、足りないよね？ ……また、取りに来てくれる？」

「それはいいけど」

この一件の中で一番どうでもよいことだ。

「ねえ、この服、何に使うの？」

「え？」

「ほら、やっぱりあんまり丈夫にはならないからさ。何回も着せた

り脱がしたりするようならすぐ傷んじやうなと思って」

そう言ったのは勿論口実で、本当は根本的なことが知りたいのである。着せ替えを繰り返そうが繰り返すまいが、どのみち花びらは遠からず萎れてしまっだろう。

どうでもよいことに食いつかれたように、少女は少しきよとんとした。それから意味がわかったという顔をして、大丈夫、と答えにならない答えを返した。

「そうなの？」

「うん。それは、大丈夫」

人形を抱き直してきつぱりと言う。こうなると頑固で口を割らないことは、数度に満たない接触でわかりつつあった。

元より期待してもいなかったが、不満を示すために溜め息を一つ吐いてみせ、じゃあまた明日ね、と約束してすめは踵を返した。途中で振り返ってみると、少女は既に花びら集めに没頭している。本人が真剣であることだけは、どうやら確からしかった。

人形

袖は手首まで、裾は足首までを覆う、桜の花びらでできた人形用の服。

試行錯誤を重ねながらそんな物を作り上げる破目に、どうして陥ったのだろつとすずめは首をひねったが、ひよんなことから、とか言いようがない気がする。たまたま見かけてたまたま話しかけた、知らない少女に頼まれたからだと言ってしまったては、事実ではあるが何だか身も蓋もない。見かけたのは偶然で、話しかけたのは成り行きで、頼まれたのは 聞き入れてくれそうだと思わせてしまったためなのだが。

「結構もつのね」

花びら入れにしたゴーフルの缶と、縫いかけの袖とを代わる代わる睨んですずめは言った。一心不乱に針を運んでいた姉は、え？とちゃんと聞いていなかったたらしい声と共に顔を上げた。

「花びら。最初の方のはそろそろ駄目になる頃じゃないかと思ってただけだ」

古いものと新しいものの区別がつかないのだ。指で挟んで縫い合わせたものも、缶の中身と同じように今以て瑞々しい。見た目がきれいで長持ちするなら、勿論それに越したことはないのだけれど。

「駄目になる前に仕上げたいわね」

「あー、はい。サボらないでやります」

「そういう意味じゃないのよ」

そう言いながらせつせと手を動かしている姉は、鈴りんという名のあの少女と顔を合わせたこともない。飽くまでもすずめの手伝いなのである。すずめより仕事が進んでいるとしても。

針山に休ませていた針を抜いて、どちらが請け負ったのかこれではわからないと、妹は自嘲気味に考えた。

「そもそも最初に追及しとくんだったなあ。理由も言えないような

ことは聞けないって」

「すずめらしいわ」

理由を聞かずに引き受けてしまったことがか、聞くべきであったと後悔していることがか、今さら強いて聞き出せないことがか、あるいはひつくるめてか、明言せずに姉は笑った。妹は唇を尖らせた。「お姉ちゃんは気にならないの？」

「いずれわかると思ってるの。鈴ちゃんの事情が解決したときに」

「そうかしら？」

「セオリーでしょ」

「……何のよ」

推理ドラマではあるまいし。

「鈴ちゃんにはちゃんと理由があるの。桜の服のことにも話さないことにも。そう思うようにしてるだけ」

「思うようにはしてるよ。あたしも」

理由はあるに違いない。少なくとも鈴にとっては、十分理由となる何事かが。自分が推測できないことは、その理由が妥当でないことを意味しない。だからここまで付き合っているのだ。

ただ、そう思ったら、姉は本当に気にしないのだろう。頭でそう考えて追及を控えるのではなく、妥当である保証もないという事実にもこだわらず。自分もそういう性質たちであればと、似て非なる妹は溜め息を吐いた。

鈴ちゃんに会ってみたいわ、と言い出したのを、断る理由は特になかった。

「どうせ行くんなら、お姉ちゃんも訊いてみてよ。花びらの服なんてなんで欲しいのか。子供の扱い、あたしより上手でしょ」

「買い被りよ」

並んで自転車を走らせていた姉は、返事をその一言で済ませ、ス皮ードを落として後ろに回った。ちょうど大通りに差しかかったためであり、歩道で横に並ぶわけにはいかないためであるのはわかる

ものの、どうも逃げられた気分になる。

坂を下れば左手に自然公園が現れる。ペダルを踏み込まず勢いに任せて、滑るように横断歩道の前を通り過ぎたとき、不意に何か飛んできてとさつと左肩にぶつかった。

その弾みに軌道を変えて、後方に落下したらしいそれが何なのか、見て取る暇はすずめにはなかった。直後に急ブレーキの不快な高音が響き、重なるように公園の中で甲高い悲鳴が上がって、はっとして自分も急停止する。振り返れば姉の自転車の、止まった拍子に角度がずれたらしい前輪の真ん前に、すっかり見慣れたあの人形が転がっていた。笑い声が聞こえた。

何が起こったか理解するなり、すずめは自転車を乗り捨てて、低い柵を飛び越えて木の向こうへ走り出た。手を叩いていた少年がげつという顔をする。既に気づいていたらしい他の二人はすばやく逃げたが、出遅れたその一人の腕を年上の少女はつかまえた。視界の端を掠めて、鈴が歩道へ飛んでいく。

「あんたね、……あんたたちねえ！」

勿論、あのとときの三人だ。人形を取り上げて楽しんでいた、あの「も一度やったらただじゃおかないから！ この腕切り落としてやるからね……！」

次など待たずこの場でもぎ取ってやろうかとばかり、手に渾身の力を込める。言葉の方は聞き流している様子の少年も、振り払おうとして払えないことには焦ったようだった。

八つ当たりもあつたかもしれない。事情が一向にわからない苛立ちを転嫁した部分もあつたかもしれない。けれどその分を差し引いても、少女は猛烈に腹を立てていた。

自分に遮られなければ、人形は車道まで飛んでいったらう。明かさないだけでちゃんと理由があるはずの鈴とはわけが違う。人の物を奪い取って車のただ中へ放ることに、真つ当な理由のあるはずがない。

「わかったら、あの子に二度と近づくんじゃない！」

逃がさないことよりも痛めつけてやることを選んで、怒鳴るなり
すずめは爪を立てた。効いたようで少年は顔を歪めたが、その隙に
その手を振りほどき、うぜえんだよ、などと罵りながら仲間を追い
かけた。

視線で焼き殺せるものならそうしてやろうかという形相で、消え
ていく三人の姿を睨みつけながら、少女は息を整えた。気を落ち着
けてから歩道を振り返れば、人形を抱えた鈴の背を、姉がなだめる
ように撫でていた。

「大丈夫よ、大丈夫。どこも怪我なんてしてないわ」

鈴は頷いた。震えているようだが泣いてはいない。人形は傷つか
ずに済んだ。

今になって通行人の目を気にしながら、すずめは柵を跨ぎ越えた。

「……怖かった」

鈴が呟く。

「大事なの。すごく大事なの……」

「うん。無事でよかったわね」

見知らぬ相手であることに、ここでようやく思い至ったらしい。

少女は幾分不安そうに姉を見上げたが、

「お姉ちゃんのお姉ちゃんよ。縫うの手伝ってくれてたの」

型紙も作ってくれたのよと紹介すれば、納得の表情でぺこりと頭
を下げた。

自転車を公園に引き入れて停めると、待ちかねたように鈴は飴の
缶を差し出した。すずめは持参したゴーフルの缶に花びらを空けて
返し、続けてもう一つ持参していたクッキーの缶を開けた。嫌なこ
とをとりあえず忘れるには、別の話題を持ち出すに限る。

「まだ途中だけど、今のところこんな感じなの」

中身は縫いかけのワンピースである。前後の身頃と左右の袖は一
通り縫い上がり、後はスカートを残すのみとなっていた。型紙は既
に見せているけれど、念のためもう一度完成前に、イメージに合っ
ているかどうか確認しておきたかったのだ。

「ちよつと大きいかな」

「大きいのはいい。着られれば」

よく考えれば随分なことを言つて、取り出した服と人形を少女は比べた。直接着せては大きすぎるかもしれない。今の服の上から重ねてちよつどよいぐらいだろうか。

落ちて間もないかのように艶やかでも、花びらの一枚一枚は小さい。どうしても縫い目だらけになるから、服としては幾分ごわごわとして不格好だ。縫い子が気にしていたことには、けれども依頼人は触れもしなかった。ほつとするような、物足りないような。

姉は膝に手を当てて覗き込んだ。

「どんな感じが着せてみる？」

「え？……」

「それともできてからのお楽しみがいいかしら」

「あ、うん。鈴はその方がいい」

「そのときは見せてね？ 似合うかどうか」

買い被りと本人は言つたけれど、子供と打ち解けるのは姉の方が遙かに早い。鈴の受け答えが親しげになるまで然程の時間はかからず、すずめは少々羨ましく感じた。

入学式までに終わらなかつたらどうしようかと実は案じていたのだが、ありがたいことに杞憂に終わった。見映えがよいとは言いつらいにしても、桜の花びらを綴り合わせたワンピースは無事に完成を見たのだ。

納品には当たり前のように姉もついてきた。あまり人目に曝したくないすずめは、公園の中でも桜のない、従つて人の集まらない空き地へ、場所を移してから缶を開けた。

「こんなので、よかつた？」

「……うん。これで大丈夫」

袖や裾の長さのことを指しているのだろう。即座に着せるかと思えばそうではなく、緊張の面持ちで年上の少女たちを見上げる。

「ありがとうございます。……びっくりしたら、ごめんなさい」
そう言ってから思い切ったように、ワンピースを人形に被せた。
袖が手首までを、裾が足首までを、注文通り覆ったのを作り手は見
届けた。

その途端、突風が吹きつけた。反射的に目をつぶったのと、糸の
千切れるぶちつという音を聞いたのとは同時だった。軽く跳ねたよ
うな音がそれに続いた。そしてその一吹きだけで風はやみ、不自然
さに気づく間もなくすずめは瞼を上げて　　鈴の目の前に、一人の
少年をみつけた。

「え」

「お兄ちゃん！」

鈴は少年にしがみついた。

「鈴！　ありがとう！」

明るい叫びと共に、少年は鈴を抱き返す。一歳か二歳、鈴よりも
上だろうか。顔も声も記憶にないのに妙な既視感がある。服の所々
に桜と思しき花びらをつけていて、　　そうだ、服だ。見覚えがあ
るの。はっとしたとき、少年は笑顔をこちらに向けた。

「ありがとうございます！　お姉さんたちのおかげです」

「……まさかと思うけど」

一本指を立てて、少年を指す。はい、と相手は頷いた。

「僕、あの人形です。人間に戻れたんです、あの服のおかげで」

「……うそお」

「蝦夷菊のお襦袢だわ」

姉の言葉に、というよりも口調に、すずめは目を剥いた。

「何か知ってたの!？」

「そういうお話があるのよ。この前調べたら『六羽の白鳥』ってタ
イトルだったけど」

メルヘンにそんな話があると、そういえば言っていたような。

「主人公の六人のお兄さんが、魔法で白鳥にされちゃうの。人間に
戻すには妹が、蝦夷菊の花でお襦袢を作らなくちゃいけない。その

間喋っても笑ってもいけないっていう」

「ちよつと違うね。僕のは鈴が作っちゃ駄目で、人に頼まなきゃいけないかったよ。喋っちゃいけないってこともなかったし。桜だし」

「魔法のことは言っちゃ駄目だったよ」

「……いや、言ったら信じなかったと思うわ」

どこかぼうつとしたまますずめは呟いた。

「ね、セオリーでしょ。最後になるまで事情を話せないっていうのは」

「かもしれないけど……魔法って」

そもそもどうして、どこで、誰にと、問おうとして思いとどまる。お伽噺において、子供たちを苦しめる定番は継母だ。……いや、でも、まさかね。セオリーだからって。

尤もその前に、魔法にかけられた、という点が第一の『まさか』ではあるのだが、現にあの人形はもう影も形もない。少年の服装はあの人形と同じだし、姉妹の努力の結晶は引き千切ったような残骸になって、少年のシャツの上や足許に散らばっている。腕を切り落とされたときには、鈴は身も世もなく泣き叫んだ。それに 片腕の中頃に、黒っぽい線が走っている。黒糸で縫いつけてやった人形の腕は、ちょうどあの辺りで切られていたはずなのだ。

「……ていうか、なんでお姉ちゃん解説する側なの」

「あら、わたしだって驚いたわよ。似てるとは思ってたけど」

「受け入れるまでが早すぎるよ」

自分だけ頭が固いようではないか。はあつと大袈裟に息を吐いて首を振ったそのとき、自分たちしかいないと思っていた空き地の入り口に、五人目が立ち尽くしているのが目に入った。

「 あんた！」

叫ぶなりひつと声を上げて身を翻し、躰きそうになりながら逃げていったのは、あの三人のうちの一人、つかまえて直接怒鳴りつけたことのある少年だった。一人で通るかかったらしく仲間は見当たらない。

僅かの間だけ見えた顔は青くなっていたようだ。怒鳴ったときには反省の色は窺えなかったのだから、自分に怯えたわけではないだろう。……ということは。

「見られた、かな？」

「かもしれないけど。困らないんじゃない？」

慌てず騒がず姉は肩を竦め、妹はちよつと考えて頷いた。人形が人間になったなどと、少年がもし言い触らしたとしても、本気にする者がどれほどいるだろう。

「怖がつてた」

兄に抱きついたまま、愉快そうに鈴が言う。四人は顔を見合せて笑った。恨みを買った相手にまつわる、誰も信じてくれないであろう不思議な出来事を見せつける。なかなか悪くない仕返しに、期せずしてなったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0566s/>

桜

2011年8月21日03時16分発行